

世界史

アツプデート

ダーウィン

ここに注目!

- 英国の科学者、チャールズ・ダーウィンは『種の起源』を著し、進化論を提唱した人物として知られるが、その内容が本人の意図とは別の形で伝えられたり、反対の意味で広まったりしている。
- ダーウィンの功績は進化論だけではなく、古生物学や心理学など多岐にわたる。どれか一つでもダーウィンと同じレベルで取り組むこ

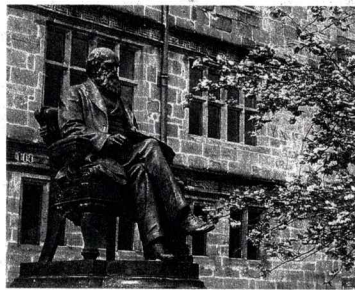
とができれば、その分野の開拓者として名を残すことができるとさえ言われる。

ダーウィンは在野の研究者で、大学に籍を置かず、ロンドン郊外にある「ダウンハウス」と呼ばれる自宅に籠もり、研究を続けた。社交の場に出ない代わりに、手紙を研究者に送り、自身の研究に関する情報収集を行った。

古生物、心理学でも功績

ダーウィンの生涯

- 1809年 英国で生まれる
- 1831年 ビーグル号の航海に出発
- 1835年 ガラパゴス諸島に上陸
- 1836年 英国に帰国
- 1839年 『ビーグル号航海記』を出版
- 1859年 『種の起源』を出版
- 1882年 死去



故郷の街にあるダーウィンの像―鈴木准教授提供

チャールズ・ダーウィンは(1809〜82年)は『種の起源』を著し、進化論を提唱した。ダーウィンは生きた19世紀のヨーロッパ社会は、人間や他の生物は神によって創造されたとする宗教観が支配的で、ダーウィンの「自然淘汰による進化」という考えは、生物学に革命をもたらした。

進化生物学と生態学を専門とする千葉聡・東北大学教授は「現在の進化に関するいろいろな考え方の根幹になる部分を提案したという意味で、偉大であり、先駆

者だ」と評価する。

ダーウィンについての研究は古くからあるが、特に1980年代以降進展し、2000年代には新しい書簡の発見や、それらのデータベースの整備によって飛躍的に進んだ。その結果、ダーウィンの考えが、高名な故に本人の意図と別の形で伝えられ、広まったことが明らかになっていく。

「最も強い者が生き残るのではない。最も賢い者が生き残るでもない。唯一

生き残るのは変化できる者である」

『種の起源』の一節として、たびたび自己啓発の文脈で紹介されている言葉だ。しかし、千葉教授によれば、ダーウィンの言葉ではなく、『種の起源』にも登場しないという。それどころか「ダーウィンは、進化の普遍法則は最も強い者が生き残らせ、最も弱い者が死なせることだと、正反対の意味のことを書いていた」という。

科学史の研究で、1960年代に米国の経営学者が、ダーウィンの考えを独自に解釈して論文に記した言葉だったと分かっていた。その論文を他者が引用を重ねるうち少しずつ変化して、ダーウィンの言葉として誤って伝えられるに至ったという。

専門とする鈴木紀之・高知大准教授だ。鈴木准教授は「『進化論の提唱者』の何倍もの科学的価値を後世にもたらした。まるで5人のダーウィンがいたと思えるほどだ」と語る。

ダーウィンの重要な功績として鈴木准教授が挙げるのが、古生物化石の発見だ。ダーウィンはビーグル号に乗船して、南アメリカ大陸を調査し、ウマの臼歯の化石を発見した。スペイン人が入植した際、在来ウマが見当たらず、ウマの化石も発掘されていなかった。発見は、南アメリカ大陸にかつて野生のウマが生息したことを示す初めての証拠となった。鈴木准教授は、ビーグル号の航海で得られたダーウィンの化石コレクション中、科学的に最も重要との評価もある」と指摘する。ダーウィンは科学界に初めて認められたのは、古生物学者としての実績だった。

と表情の研究は、心理学分野で高く評価されている。ダーウィンは、感情や表情が生まれつきのものか、周囲の刺激から学習して身につくのかを区別しようとした。生まれつきなら、遺伝によって親から手へと伝わった本能である可能性があった。

それを確認するため、ダーウィンは、生まれて間もない長男の観察日誌をつけ、後に感情や表情は本能であるとする論文を発表する。観察例が限られるなど、現代から見れば十分でない面もあるが、この論文は、乳幼児の発達心理に関わる先駆的な研究方法として評価されているという。

ほかにもサンゴ礁やミミズの研究などに取り組んだが、鈴木准教授は「ダーウィンと同じレベルで取り組むことができたなら、その人物はその分野の開拓者として不朽の名を科学界に残すことになるだろう」と話している。(前田啓介)